三番目にいい服とパジャマ

久々に地元の仕事仲間と東京で会った。「友人」というと語弊があり、「知り合い」というとちょっと遠すぎる。「仕事仲間」というジャンルが人生の手帳に加わったとき大人になったなと思った。

学生時代の友達に会っても共通の話題はどんどん減っていく。大体、恋の話で結ばれていたりしたけど、結婚した時点で、目をパチパチさせるような話はなくなる。次に結ばれるのは仕事での「あー、それな、わかるわー」か、子育てでの「あー、それな、わかるわー」になるんだけど、私の場合はどちらもそういう風にはなれず、お茶をしばきながら雑談をできる人は段々減っている。

結果、編集者とか音楽ディレクターと打ち合わせをしているときにひょんなことから出た余談が、最近は一番興味深い。

「あの映画見た?」「この本がすごく面白かったんで読んでみて」「最近こんなレコード買ってね」

会話だけ聞いたら大学生の昼休みだ。あの頃は、みんなこういう話をしていたのに、この年になってくるとできる人がなんとなく限られてくる。私達の場合、日常生活や趣味の延長に仕事があるから、境目がないのかもしれない。そう、書くことを「仕事」と思ったことがほぼないのだ。じゃあ、遊びかと言われるとそういうわけでもない。一応、やる気スイッチはＯＮにする。でも、自分のために書いている感は、昔から変わらないのかもしれないな。

というわけで、打ち合わせという名のお茶会が、頭の中を整理してくれたり制作のヒントになったりする。私にとって昼休みのような息抜きの場所でもある。でも、油断ならぬ相手であることを忘れてはいけない。彼らは会社を背負ってお茶を飲んでいる。ただ私と雑談するために喫茶店にいるわけではないのだ。

「ところで原稿の調子はどうですか？」とか、「こないだもらった歌詞ですが……方向性がちょっと違いまして」とか、切り込めるタイミングを見計らっているのも知っている。

「まかせてください！」と言いながら、コーヒーは苦味を増し、また話は朝ドラの名シーンに戻っていく。「友人」と「ビジネスパートナー」の間を行ったり来たりする、非常に絶妙な関係を「仕事仲間」と呼ぶ。プライベートで飲みに行ったり、温泉に行ったりもしない。実家の話や、夫の愚痴を言わない。

生活で繋がっているのではなく、夢で繋がっている。音楽や文学といった非常時には役に立たぬもので繋がっている。でも、きっと人間にとって必要なものだと信じて、私の作るものを信じて、一緒に駆け抜けてくれる人。

学生の頃のサークル仲間のようでもあるのはそれでなんだな。殆どの人にとってはなくても生きていけて、でも一定の人々にはないと生きていけないものを全力で作っている人たち。明らかに偏っている人たち。良いもの作ってヒットさせるぞと、ポジティブなパワーで繋がっている人たち。

どちらが欠けても走りきれない。私は自分のためだけに頑張っているわけでないと思う。頑張ってくれる伴走者がいるから、頑張れる。伴走者のために頑張る。

ここまで感動的に書いたけど、やっぱり友達ではないのだ。家族や友人よりも多分もっと薄情な関係。悩み相談もしなければ、思い出話をしたりもしない。だからこそ、軽やかに走れる。

昔の友だちは、ずっと愛用しているパジャマや枕カバーのようだと思う。元気なときは、そこにいてくれていることに気づいてなかったりする。けれど、弱ったとき一番に着替えて涙を吸い込ませられるのは彼女らだ。友達は何でも許してくれるし、私も許す。宝物箱に入れておいて、ときどき思い出す存在。仕事仲間と会う時は、三番目くらいにいい服を着てくけど、友達に会うときはパジャマのままで行ける。